

津山郷土博物館だより【つく】

津博

TSUHAKU

2012.5
NO.72

トピックス

- ・津山藩松平家文書が
県指定文化財になりました
- ・ホームページをリニューアルしました！
- ・高田小学校6年生 トンボ玉づくりを体験

ミニ企画展

「お正月～お正月と縁起物～」

所蔵資料の紹介

西東三鬼遺品の硯

梶村 明慶

研究ノート

元殿様と銘菓「初雪」

小島 徹

アラカルト

- 平成24年度 行事予定
- 大事異動
- 新刊のごあんない



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

津山藩松平家文書が 県指定文化財になりました

当館の所蔵資料で津山市重要文化財であった松平藩文書(愛山文庫)のうち、元禄〜明治初期の津山藩政資料が、「津山藩松平家文書」の名称で岡山県の重要文化財に指定されました(3月9日付)。

津山藩松平家伝来の膨大な資料群は、津山城跡の西北、津山市小田中の旧松平家倉庫に長く保管され、昭和31年に市の重要文化財に指定されました。このたび県指定になったのは、藩の各部署で記された日記や藩士の奉公書をまとめた勤書、歴代藩主が拝領した將軍家の御内書など、総数5,399件7,151点におよぶ津山藩の藩政資料です。

このほかにも、廃藩以後の松平家記録、和書・漢籍の版本・写本類などが多数あり、全体として江戸時代の津山および美作地域を研究する上で必要不可欠な資料群を構成しています。今回の県指定により、調査研究への活用機会が増えれば、その資料価値はいつそう高まることでしょう。



ほかにもあります 指定文化財の収蔵資料

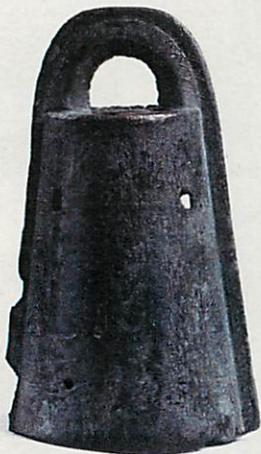
文化6年(1809)、津山松平藩の御用絵師・鍛形蕙齋が西洋画法を採り入れて江戸の全貌を描いた鳥瞰図の屏風。名所・旧跡や諸大名の藩邸のほか、江戸の町で暮らす庶民の姿も細かく描かれています。5月に開業する東京スカイツリー展望台からの眺望が、この絵と同じ視点になるため、世間の注目を集めています。

※他館への貸出が多いため、今年実物を当館で展示できません。現在は、複製を展示中です。



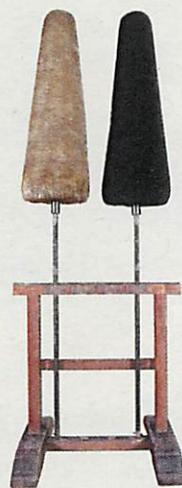
ひとめず
▲江戸一目図屏風 平成10年3月24日指定

岡山県指定



け さだすきもん どうたく
▲袈裟襷文銅鐸 平成3年4月5日指定

昭和25年(1950)に勝央町植月北の畑地で発見。県内で最古の形式に属し、同じ鋳型で造られた銅鐸が、島根県加茂岩倉遺跡から出土しています。



おおみ やり くまげ やり さやつき
▲大身槍 熊毛槍鞘付 平成12年3月28日指定

鞘の装飾に熊の毛を用いた槍。長さは約3m、重さは約15kgで、これほど大きくて重い槍は珍しく、津山藩松平家の行列の目印になっていました。



▲津山松平藩主所用輿 こし 平成 23 年 4 月 26 日指定

津山松平藩主が用いた輿。諸大名の中でも、使用を許されたのはわずか22家でした。將軍宣下など、藩主が束帯を着用する特殊な場面で使われました。



▲津山松平藩主所用乗物 のりもの 平成 23 年 4 月 26 日指定

津山松平藩主が用いた乗物。婚礼道具として大切に残される女性用に対し、日常的に使う消耗品であった男性用として珍しい残存例です。



▲津山景観図屏風 (寄託資料) 平成 16 年 3 月 19 日指定

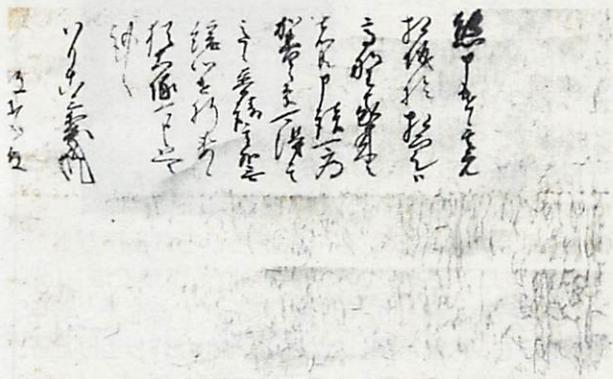
鋏形蕙斎の作品で、津山城下の景観がほぼ実景どおりに描かれています。左隻は春、右隻 (写真) は秋の情景です。江戸時代の津山を詳しく写實的に描いた唯一の作品として貴重なものです。



▲玉置家文書 たまき 昭和 31 年 7 月 4 日指定

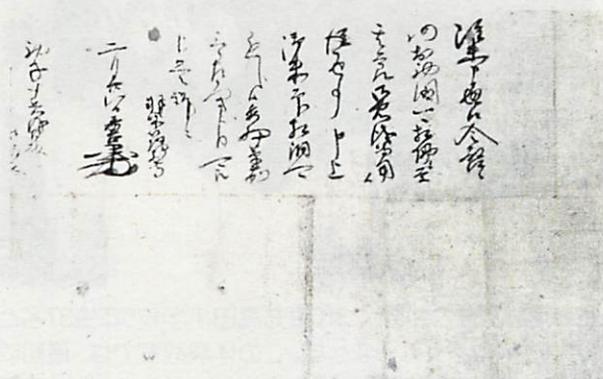
玉置家は、元文2年 (1737) 以降、津山城下町の大年寄役を代々勤めました。家に伝来した城下の町政に関する資料は1,044点にもおよび、津山城下の動静をつかむのに不可欠な資料群です。

津山市指定



▲牧家文書 (寄託資料) 平成 14 年 9 月 26 日指定

戦国時代、高野郷を本拠としていた国人・牧家の古文書で、浦上宗景や黒田孝高らの戦国武将の書状8通と、近世初期の村方文書1通です。当時の美作の国人領主の動向がうかがえる重要な資料です。



▲牧山家文書 (寄託資料) 平成 14 年 9 月 26 日指定

戦国時代、新野庄西中を本拠とした国人・中西家の古文書。羽柴秀吉や毛利輝元など戦国武将の書状7通で、江戸中期に絶家、縁戚・牧山家に伝わりました。当時の美作の情勢を探るのに不可欠です。



ホームページを リニューアルしました!

新URLは <http://www.tsu-haku.jp> です。

4月の初めから、当館のホームページのデザインを一新し、内容を大きくリニューアルしました。館の利用案内や主な収蔵資料の紹介のほか、特別展や講座、子供向けの体験教室などの行事案内も、このホームページ上で公開し、随時更新してまいります。この機会にぜひ、新しいホームページを「お気に入り」に登録していただき、定期的にチェックしてくださいませよう、よろしくお願いいたします。

ミニ企画展



「お正月～お正月と縁起物～」 を開催しました。

平成23年11月30日～平成24年1月29日までミニ企画展「お正月～お正月と縁起物～」と題しまして当館所蔵の資料からお正月にちなんだものや縁起物を展示しました。

主な展示資料として、津山藩お抱え絵師の狩野如林、幸信の「大黒図」 鍬形蕙斎の孫になる鍬形勝永の「恵比寿・大黒図」、恵比寿様の土人形や昔の百人一首などを展示しました。

皆様にとっても、当館にとっても、よい一年になればと思います。

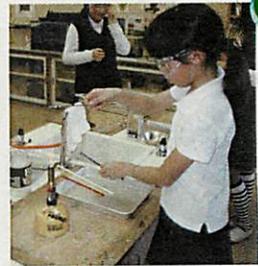
高田小学校 6年生 トンボ玉づくりを体験



22年度にひきつづき、23年度も高田小学校6年生37名とトンボ玉づくりを楽しみました。この体験教室では、最初にトンボ玉についての簡単な歴史を学習した後に、作り方を実演します。実演になると、子供たちは机の周りに集まり、興味津々な様子で見えています。トンボ玉は、ガラス棒をバーナーの炎で熱し、溶けてきたところを鉄の棒に巻きつけて丸い玉を作ります。巻きつけたガラス玉が冷めたら、鉄の棒から外して完成です。火傷にはくれぐれも気をつけるよう

に、注意事項を再度確認して、トンボ玉づくりにチャレンジです。

誰から作る?どんな色を使う?どんな模様にする?としばらく悩んでいた子供たち。ガラス棒をバーナーで熱し始めると



「先生～、まだ?もうええ?」とあちこちから声が上がリ、溶けたガラスを鉄の棒に巻きつける作業では、「先生～、こっち来て～」の声が飛び交っていました。器用に作った子も、悪戦苦闘しながらなんとか作り上げた子も、みんな出来上がったトンボ玉に大喜びでした。

博物館ではトンボ玉づくりの他にも、勾玉づくりや土器づくり、あるいは実物の火縄銃を用いた学習など、博物館資料を利用した体験講座を実施しています。今後も学校と連携を図り、子供たちに様々な体験を提供していきたいと思っています。

所蔵資料の紹介

西東三鬼遺品の硯

梶村 明慶



代表作に「水枕がばりと寒い海がある」等があり俳句の鬼才といわれた俳人西東三鬼（現在の津山市南新座出身一九〇〇年～一九六二年）ですが、遺品等、西東三鬼関係の資料について郷土博物館ではいくつか所蔵をしています。

この写真の硯も西東三鬼が愛用していた遺品の一つで、硯の裏側を見ていると「一等賞津山教育共進会」

と彫られてあります。

昭和二十六年三月発行の「天狼」という俳句の雑誌に三鬼は「硯―師の思い出―」という題でこの硯にまつわる話を記しています。

それによるとこの硯は小学校の時の初恋の思い出の品ということ、相手は小学校二年生の時の担任の先生でした。

その当時十九歳位の年令でぼつ

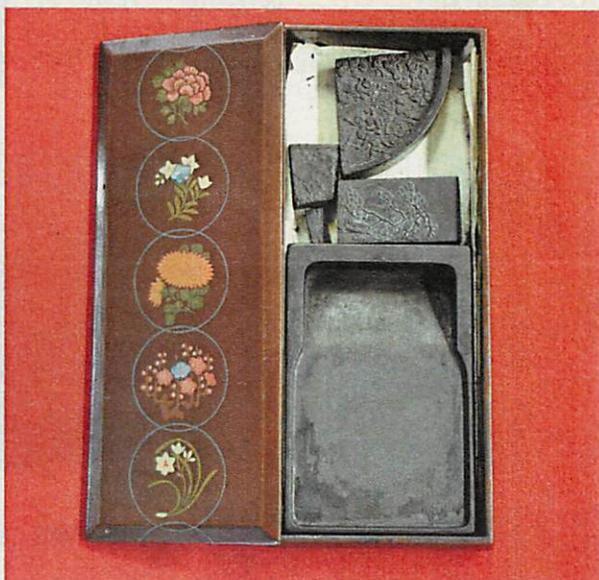
ちやりとした先生で、三鬼は先生の授業の中で「書き方」の授業が一番好きだったということです。

その時間先生は生徒一人一人を後ろから抱くようにして筆の持ち方や墨の含ませ方を教えてくれたようですが、その時の様子を三鬼は「私は今日悪友共から、三鬼老と呼ばれる年令に達しましたが、しかし、只今、この瞬間の事のやうに思いだします、先生が私の肩越しに、筆を持った私の右手を、えくぼのある先生の手で握られた事を。私の耳たぶに、先生の優しい鼻息がかすかに触れた事を。他の子供より長い間、そうしてゐて下さいました事を。」と記しています。

この硯はその当時に共進会に出品した「書き方」で一等賞をとった時の賞品なのですが、実はその作品は担任の先生の字を「すきうつし」したものであったと暴露しています。

この随筆を書いた当時はすでに五十歳を超えて

いましたが、三鬼は幼い日の初恋の思い出の品をずっと手元に置いて使っていたようです。



もととのさま 元殿様と銘菓「初雪」

小島 徹

はじめに

皆さんは津山銘菓というと、何を思い浮かべるでしょうか？市内の各店舗で多様な商品が販売されていますので、答えは十人十色かも知れませんが、ここでは和菓子「初雪」にまつわる資料とエピソードをご紹介します。



写真1 津山銘菓「初雪」

「初雪」とは？

まず、「初雪」という和菓子がどのようなものか、確認しておきましょう。

「初雪」は、砂糖が少し入った餅を切り分けて薄く延ばし、乾燥させた干菓子です（写真1）。そのまま食べるのではなく、火であぶり、キツネ色にふっくらと膨らませ、冷ま

してから食べます。サクツとした軽い歯ざわりで、すぐに口の中でとけた後、ほんのりと上品な甘さが広がる、素材な味わいのお菓子で、その食感を、はかなく消える初雪に例えた命名となっています。

その歴史は古く、隠岐へ流される途中の後醍醐天皇に、里の老婆が献上したという伝承があるほか、津山藩でも戦時の食糧として蓄えていたと言われ、津山の名産として長く愛好されてきました。戦前には、三十軒以上の店で作られていたそうですが、今ではわずかに一店舗のみとなっています。

初雪代金領収書

そのような古い歴史を持つ津山銘菓の「初雪」ですが、旧津山藩主松平家の近代以降の資料の中から、購入代金の領収書（写真2）が見つかっています。その内容は、左のとおりです。

記
一、初雪 壹万三千枚
代七円八拾銭
右正三奉受取一候也
愛山 御用
十七年五月廿五日 八木熊助印

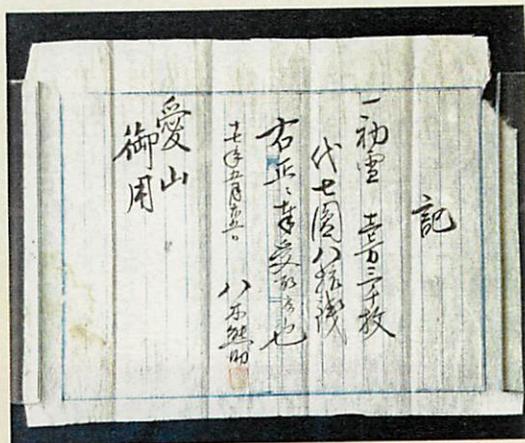


写真2 初雪代金領収書

これを見ると、一三、〇〇〇枚という膨大な量の購入で、その代金が当時の金額で七円八十銭だったということになります。一枚の単価が〇・六厘という計算になります（二円一〇〇銭、一銭二〇厘）。ちなみに、現在ではバラの二枚入り一袋が一八〇円、十四枚入り一箱が一、〇五〇円ですから、単価は七十五〜九十円です。

日付には年号が欠けていますが、明治十七年（一八八四）五月二十五日のものと思われる。差出人の八木熊助は、当時の津山に多数あった「初雪」製造販売店の店主の一人で、諸国に売り広めて名声を博したほか、夫婦ともに親孝行であるとして明治二十二年八月に岡山県知事から表彰されています（近藤鼎著『近世岡山県孝節録 初篇』参照）。宛所の「愛山御用」は、今の津山

市小田中の地藏院の隣にあった、松平家の津山事務所もしくは松平家を指していると考えられます。当時は、地藏院の周辺を「愛山」と呼び習わしていました（写真3）。



写真3 「愛山」にある松平家墓所

購入の目的は？

このように大量の「初雪」を、いったい何のために購入したのでしょうか？謎を解く手掛かりは、領収書の日付にあります。

明治十七年五月に、松平家にとつて大きな行事がありました。それは、旧藩主・松平確堂（写真4）が墓参のため津山に来ていたのです。当時七十一歳の確堂にとっては、慶応元年（一八六五）三月に離れて以来、実に十九年ぶりの津山入りでした。松平家津山事務所の日記（写真5）を基に、その時の旅程をまとめると、次のとおりです。



写真4 旧津山藩主・松平確堂
(写真は個人蔵)

約半月の滞在中、確堂は墓参だけでなく、旧臣との対面や社寺参詣、小学校見物など、かなり多忙な日程を送っている様子があるが、えます。

そして、先ほどの領収書の日付、五月二十五日は津山出發の日にあたります。この日に、松平家の御用で購入されたということは、確堂の墓参と無関係とは考えにくいでしょう。

- 4/30 東京出發。随行者・家令・中沢広江、家従・石川章二、渡辺須磨(明治期の松平家当主の康倫・康民の生母)家丁一人。
 - 5/10 昼過ぎに津山到着。愛山の宕々庵を宿所とする。
 - 5/11 夕方、なじみの旧臣十八人を招き小宴。
 - 5/12 愛山東照宮での祭典に臨席。
 - 5/13 泰安寺で法事・墓参。
 - 5/15 泰安寺で旧臣(元士族)三八八人と対面、酒肴のほか子弟の学資補助金五〇〇円を与える。その後、中山神社に参詣、帰りに衆楽園に立ち寄る。
 - 5/16 泰安寺で旧臣(元卒族)三五四人と対面。
 - 5/17 泰安寺で元大庄屋・御用商人ら七十五人と対面。徳守神社・千代稻荷神社・鶴山八幡宮に参詣。
 - 5/18 夕方、元女中ら六人を招き小宴。
 - 5/19 岡山県令宛の衆楽園保存願書を提出。夕方、旧臣十二人を招き小宴。
 - 5/20 鶴山小学校を訪問、授業・体操を見物し、筆墨を寄付。地藏院で七十歳以上の旧臣男女六十人と対面。
 - 5/21 作楽神社・高野神社に参詣。高野神社にて旧臣一同の接待を受ける。
 - 5/22 旧家老が士族を代表して御礼に来訪。津山城跡に登る。
 - 5/23 日程が合わず訪問できない時習・成器・日新の各小学校に筆墨紙を寄付。
 - 5/24 夕方、旧臣数人と別れの宴。
 - 5/25 事務所員らと別れの杯を済ませ、午前七時出發。船で吉井川を下る。
- ※ 津山滞在中、外出しない日は、愛山の宝蔵内の道具類を調査。帰途は、名所見物をしながら東海道を進む。途中、熱海で一週間ほど保養。
- 6/21 午後、東京帰着。

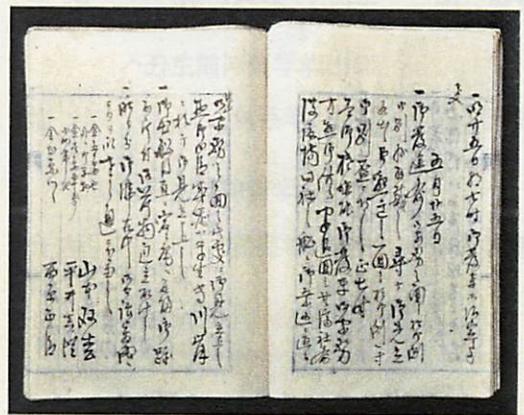


写真5 明治17年「津山家務所日記」
5月25日条

その枚数の多さから、購入目的については、次の二通りの可能性が考えられます。一つは、確堂が津山の旧臣や関係者らに別れの印として配る目的。もう一つは、確堂が東京に帰ってから、知人に津山土産として配る目的です。ただ、前者については、十五、十七日の対面時に酒肴や金銭を与えているのに、地元の品をさらに配るだろうか、という疑問が生じます。それよりも、後者の東京で知人に配るといふ目的の方が、自然ではないでしょうか。顔の広い確堂のことですから、大量に必要だったという事情は、容易に想像がつきます。

そして、「初雪」が選ばれた理由ですが、それは長期保存できることと軽いこと、この二点に尽きるでしょう。東京までの運搬をどうしたのか、記録が見当たらないのでわか

りません。しかし、当時はまだ東海道に鉄道が整備されておらず、津山・東京間の移動には十日程度の日数が掛かったと思われるため、日持ちのしない品物は論外ですし、重いものは手間が掛かります。逆に考えれば、軽いからこそ一三、〇〇〇枚もの大量購入が可能だったと言えます。

むしろ

つまり、この領収書は、明治十七年に墓参のため津山に来た松平確堂が、東京に帰ってから津山土産として配るために「初雪」一三、〇〇〇枚を購入した時のもの、ということになります。

この領収書は、まったくの偶然で見付かったものですが、津山藩主や藩士が贈答の品物に何を選んだか、という観点で資料を調べれば、類例を発見できる可能性があります。すなわち、以前から「初雪」を贈答に使う慣習があったのかも知れません。

また、大量注文を受けた八木ですが、数ある店舗の中で彼の店が選ばれた理由を考えると、親孝行で表彰されるほどの人柄ということで、商品の品質ともども評判が高かったのでしょう。松平家とその周囲の人々から「初雪を買うならここ」という信頼を得ていたものと思われま

かつてのお殿さまも賞味し、贈答に使った「初雪」。このエピソードを思い浮かべながら食してみれば、また格別の味わいを感じられるかも知れません。

平成24年度

津山郷土博物館 行事予定

特別展示

■特別展

「絵図に描かれた江戸時代の村(仮)」

会期 10/6(土)~11/18(日)

会場 当館3階展示室

出版

■特別展図録「絵図に描かれた

江戸時代の村(仮)」の刊行

■「津山松平藩町奉行日記」(二十一)の刊行

■「津山郷土博物館年報」(平成23年度)の刊行

■「津山郷土博物館研究紀要」の刊行

広報活動

■津山郷土博物館だより「津博」の刊行

教育普及活動

■古文書講座「美作の古文書をよむ」

5/17(木)・6/21(木)・7/19(木)・9/20(木)・
10/18(木)・11/15(木)・1/17(木)・2/21(木)
3/22(金) 全9回(8月と12月を除く)

■夏休み子供歴史教室

「弥生土器をつくろう」

7/25(水)・8/16(木) 全2回

「カルメ焼きをつくろう」7/27(金)

「勾玉をつくろう」7/31(火)・8/1(水)

「トンボ玉をつくろう」8/7(火)・8/8(水)



■文化財めぐり(友の会)

5/26(土)・9/22(土)・11/10(土)・3/16(土)

人事異動 平成24年4月1日付

●転出 主任(学芸員) 乾 康二

↓
津山洋学資料館主任へ

●転入 主任(学芸員) 小島 徹

↑
津山洋学資料館主任より

●新採用 主事(学芸員) 杉井万里子



博物館入館案内

●開館時間：午前9：00～午後5：00

●休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他

●入館料：一般 200円(160円)

高校・大学生 150円(120円)

中学生以下
障害者手帳提示の方
市内在住の65才以上の方 } 無料

※()は30人以上の団体

新刊のごあんない

◆「津山松平藩町奉行日記」(二十)

(博物館紀要 第26号) ¥800

今回は享和2年(1802)の日記の翻刻です。これで全94冊のうち
32冊(全体の約3分の1)の翻刻が終了しました。



博物館だより 津博 No.72 平成24年5月1日

編集・発行：津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92

TEL(0868)22-4567 FAX(0868)23-9874

E-mail: tsu-haku@tyt.ne.jp

印刷：株式会社 廣陽本社